

## 夏に開く江戸の華

森記念財団研究員  
脇本敬治



この写真は何の花か分かるだろうか。小学生の時に栽培したことがある人は多いと思うが、これらはすべて朝顔、その中でも特に貴重とされる変化朝顔である。

朝顔は日本人にはとても馴染のある植物であり、その栽培もかなり昔から行われていた。千利休は秀吉をもてなすために、庭に咲き誇っていた朝顔を刈取り、茶室に一輪だけ活けたという話が伝わっているように安土桃山時代には、かなり広く栽培されていたようである。

朝顔が大きなブームとなり、変化朝顔を生み出す場となったのは文化・文政期(1804～30)と嘉永・安政期(1845～60)の江戸だった。なかでも朝顔市の開催で現在でも有名な入谷周辺は、朝顔栽培の中心地となり、武士、町人のへだてなく、同好の士が集まった。競い合うように、珍しい朝顔をつくり出した結果、写真の様な変化朝顔が生み出され、希少種を載せた画集も出版された。遺伝子の知識もない時代に、さまざまな色、形を生み出したことは驚嘆すべきことだと思う。世界的にもこれほどまでに変化を遂げた園芸植物は他になく、生きた文化遺産といわれている。

変化朝顔は戦災で多くが失われ、絶滅寸前になったが、幸いにも復活しつつある。東京では7月から8月にかけて各地で変化朝顔の展示会が開催されている。8月29～31日には日比谷公園で、また横浜市こども植物園、佐倉市の国立歴史民俗博物館でも展示されている。江戸の美意識と園芸文化を伝える貴重な機会なので、ぜひ実物を見ていただければと思う。

参照) [変化朝顔研究会\(変化朝顔展を日比谷公園で主催\)](#)

[横浜市こども植物園](#)

[国立歴史民俗博物館](#)

(写真は上下共に 2012 年につくば実験植物園で開催された変化朝顔展に出品された朝顔である)

